

健康文化

## 公衆トイレ考

前越 久

忘れもしない、今年の5月26日（土）午前11時30分ころであった。午後1時から開催される日本放射線技術学会・将来構想特別委員会に出席するため、新幹線で京都駅に降り立った。まだ時間があったので、烏丸口の地下街で昼食をとってから、太子道にある学会事務局に向かうこととした。エスカレータで地下街に下がり、まず、用を足そうとして通路を左方向に行きついた右手に位置する公衆トイレに入った。この地下街は完成後まだあまり年数が経っていないためか、明るくて綺麗な地下街である。ここのトイレも狭いが、よく掃除が行き届いているので時々利用させて頂いていた。ここに油断があった。用を足して戻ろうとしたとき、掃除した直後で床が濡れていたため左足をとられて滑って転んでしまった。力士が股割りといって体の柔軟性をトレーニングする時のように、左脚がズズ——ッと前の方へ伸びて行ってしまい、左大腿部の背面の中の方でピリピリと血管が切れるような感じがした。しばらくの間、左脚がしびれてしまい、痛くて立ち上がることもできなかった。それで、トイレの出入り口で座ったままでいた。その間、10人くらいの出入りがあったであろうか、60?70歳くらいの一人の男性が「大丈夫ですか、救急車を呼びましょうか」と声をかけてくれた。顔面も蒼白になっていたからだったのかもしれない。親切な方は何処にもおられるものである。10分程経過したのであろうか、何とか立ち上がることができ、ゆっくり、ゆっくり歩いて地下街を地下鉄京都駅方面まで通り抜け、昇りエスカレータにて地上に達し、タクシー乗り場まで辿り着いた。運悪くタクシー乗り場は、今まで経験したことがないほどの長蛇の列であった。仕方なくズルズルとその列を消化し、学会の事務局に着いたのが12時30分頃であったのだろうか。

当日は上記委員会の委員長として、今年度初めての委員会開催を招集していた責任上、何とか会議にだけは出席しなければならない気持でいた。しかし、もう1階の事務室から2階の会議室まで、たとえエレベータを使っても歩いて行くことができない状態になっていた。やむなく、前委員長に会議の進行を委ね、京都大学医学部附属病院に救急車で運ばれる運命になってしまった。

病院に到着したころは、内出血によるのであろう、左大腿部はパンパンに腫れ、痛みは極限に達していた。少し動かしても激痛が走ったため、やっとのことでX線写真を撮ってもらった。幸い骨折はないということであったため、左大腿部を弾力包帯でぐるぐる巻にされ、整形外科病室のベッドで一時休ませてもらうこととなった。私は7年前に心筋梗塞を罹患していたため、現在、血栓の予防薬であるパナルジン錠100mgであるとか、バファリン錠81mgを服用していた。これらの薬剤が、この出血量を多くした原因であろうと察した。心の中で、もうこれ以上腫れないように、内出血よ早く止まってくれ、とひたすら祈るばかりであった。このベッドも翌日には新しい患者さんの入院が決まっているということで、できるだけ今晚中には退院してほしいという意向のようであった。今日中に名古屋まで帰ることが出来るだろうかと不安であった。

夕方、7時頃になり、少し落ち着いたのであろうか、昼食をとっていないことに気づき無性に空腹感に襲われた。学会事務局の女性の事務員さんが救急車に同乗し、この時まで付き添ってくれていたのでパンと牛乳を買ってきてもらい、少し元気を取り戻すことが出来た。思わぬ迷惑をかけてしまった。それにしても、公衆トイレで滑って転んだのが用を足した後であったのが不幸中の幸いであったとつくづく思った。落ち着きを取り戻すにつれて、公衆トイレの掃除は濡れたままで放置しないで乾いたモップで仕上げをしてヨ！と自分の不注意を棚に上げて、ベッドの上で腹を立てていた。夜9時頃、次男夫婦と家内が車で名古屋から迎えにきてくれたので、夜中の12時頃やっと自宅に帰ることが出来た。翌日から翌々日にかけて、左大腿部から下肢にかけての背面部が内出血により見事な紫色に変色してきた。皮膚表面を触ると板のように硬くなっていた。自宅近くの整形外科医に診てもらったら、「こりゃーすごいなー」と感心していたので、記念？にデジタルカメラでカラー写真に納めておいた。

話は替わるが、どういう訳か、いや、偶然なんだろう、8月中の中日新聞に公衆トイレの記事が幾つも掲載されたのが目についた。おそらく、上記のような経験をしたので余計に目についたのかもしれない。そこで、目を追って紹介してみようと思う。

8月15日、中日新聞夕刊の“紙つぶて”に書かれている作詞・作曲家の中山大三郎氏の「女性用トイレ」が興味深い。劇場、空港あるいはドライブインや高速道路のサービスエリアのトイレで女性が困っている姿をよく見かけるといふ記事である。観光バスを降りた中年のおばさん達がドッと男性用トイレを占領するような光景を私も経験したことがある。原因は、男性用も女性用も同じ

スペースとすると、すべてが個室である女性用は、定員がはるかに少なくなるはずであるということと、用を足して出てくるまでの時間差も男性と女性では違うからだ、と細かな指摘をしている。さらに、私のアイデアを加えさせて頂ければ、‘あき’か‘使用中’であるかが一目で分かるように、沢山の個室トイレそれぞれのドアに赤ランプと青ランプを設備しておけば‘あき’トイレを探す時間が節約されるものと思う。中山氏の結論は、女性用トイレのスペースは男性用の3倍にして、世界一の女性トイレを目指そうと結んでいる。賛成！

**8月20日、中日新聞夕刊。**『道の駅』ランク付け、の見出しの1段記事である。国土交通省が、全国に610ヶ所ある「道の駅」をトイレ、バリアーフリ度などの指標を使い、5段階でランク付けする方針を固めたという記事である。①トイレがきれいに掃除されているか、②バリアーフリ度はどうか、③地域の情報や文化をどの程度発信しているか、などを採点基準にしている。地図にランクを記載するなどしてサービス向上と道の駅同士で競争を促すのが狙いとのことである。これも大賛成である。

**8月22日、中日新聞朝刊。**田中知事『便座長』に、長野 トイレ研究会発足、の見出しの2段記事である。トイレも「長野モデル」で！長野県は8月21日、公共施設のトイレ整備について、バリアーフリの導入やデザインを検討する「便座（トイレ）のあり方研究会」を発足させた。「トイレの個室こそ、いやしの原点」とする田中康夫知事の肝いり事業で、身障者や高齢者らに使いやすいトイレの整備を目指すとし、自ら「便座長」に就任した、と報じている。

おまけとして、**8月24日中日新聞夕刊**、3ミリコントに、[トイレ研究会便座長に]と題し「ガラス張りにはいたしません」……田中知事」というのがあった。ウ——ン、なかなかウマイ頓智だ、感心した！

**8月25日、中日新聞夕刊。**1面トップ記事である。「富士山し尿対策の切り札、バイオトイレに高い壁」という4段見出しの記事である。夏山シーズンには約25万人が登る富士山で深刻な環境問題となっている登山者のし尿処理について扱っている。し尿処理を抜本的に解決しようとして、環境 NPO 「富士山クラブ」が微生物でし尿を分解する「バイオトイレ」の実験を山頂で初めて実施し、登山者の評判も上々の成果を上げた。しかし、本格導入となると、コスト面や法律上の問題などのハードルを越えなければならないという。世界に誇る富士山の環境汚染を、根本的にくい止める手段を早急に講じてほしいものである。  
(平成13年9月6日記)

(名古屋大学名誉教授)